

朝日新聞 2016年8月27日

（文中の太字は引用者によります。）

思いがけず経歴を公にすることになったのは3年前、アフリカ東部ウガンダへの赴任時だ。

初めて大使に任命された。現地のエイズ遺児を支える「あしなが育英会」の玉井義臣会長の勧めに、「根負けして書いた」という自伝が後に書店に並ぶと、同僚らも「初めて知った」と驚く。書名は「高卒でも大使になれた」。

「学ログイン前の続き歴が幅をきかす世界で、負い目を感じてきたのが偽らざる私の外務省人生。誰も気に留めていなかったことに拍子抜けした」

商業高校を出て銀行マンになったが、小田実の世界旅行記「何でも見てやろう」に刺激され、6カ国語の勉強に夢中になる。兄の勧めで、「学歴不問」だった外務省の語学研修員試験を受けて合格した。ところが1975年の入省後、留学を予定していたデンマークの大学は受け入れを拒否。40代で派遣の機会を得た国連も先方の選に漏れた。学歴が妨げになった。

折れそうな心を支えたのは、ハンディを埋めようと「私の大学」と名付けて通った都立日比谷図書館での膨大な量の読書、そしてデンマーク人の妻だった。

現役大使約160人中、高卒は2人。27日にケニアで始まるアフリカ開発会議では、担当大使として市民社会とのつなぎ役を担う。「高卒者にもチャンスを与える日本はまだ捨てたものじゃない。若い人も諦める前に何かに挑戦してほしい」（文・写真 武田肇）